



住む人の健康を守る家をつくる。その想いは映画と同じです。

地方創生ムービーをサポートする会社 株式会社津留建設

代表取締役社長

津留輝彦

TERUHIKO TSURU



1965年、福岡県柳川市生まれ。1975年創業の津留建設二代目社長として、日本の気候風土に適した天然無垢材を使い、自然の恵みである木の特性を生かした家づくりを行っている。「健康を売る」ことをモットーに、長持ちしない建材や健康に悪い建材を排除した『0宣言の家』が特徴。

国の基準をクリアしたから「安全」なわけではない

私は映画の舞台になった大牟田市の隣、柳川市の出身で、大牟田市動物園には小さい頃から親に連れられてよく訪れていました。自分が親になってからは、今度は3人の子どもたちを連れて行った場所。本当に思い出深い動物園です。ただ、動物福祉をメインに、動物の健康、命の大切さを人間と同じように考えて飼育している動物園であることは、この映画のお話を聞くまで、全く知りませんでした。

実は、私も、人の健康、命の大切さをメインに考えた家づくりをしています。たとえば、国が推奨している建材であっても、合板、ビニールクロス、プリントされた床材など、多量の接着剤が使われていると、そこに含まれているホルムアルデヒドなどVOC(揮発性有機化合物)が室内の空気を汚染し、その空気を人が口や鼻から吸って、健康リスクが高まります。シックハウス症候群やアレルギー疾患などが、よく知られるところです。私たちはその一つ一つを検査し、人間にとって安心・安全な建材しか使いません。壊れやすいもの、人に害を与えるものをすべて排除し、ゼロにしていることから『0宣言の家』と呼んでいます。

こうした想いが、大牟田市動物園と一緒にあったということ、プラス、そこが私自身の思い出の場所ということで、今回、協賛の声をかけていただき、すぐに「やります」と手を挙げました。

しかし、空気は目に見えないものだけに、「国の基準をクリアしたから安全なわけではない」と説明しても、お客様になかなか理解していただけない時期もありました。

動物の立場に立った、すばらしい取り組みをしているにもかかわらず、県から予算を縮小された「延命動物園」の境遇と、少し似たところがあるかもしれません。ところが、武田鉄矢さん演じる園長さんが「一步一步進んでいけば、この取り組みはいつかわかってもらえる」と言っていたように、10年間、全国にいる仲間と取り組んできた結果、『0宣言の家』にもよき理解者が増えてきたのです。

その筆頭が、全国各地のお医者様です。ここ数年は、『0宣言』仕様のクリニックを建てるお医者様も多くなってきています。特に力を入れてくださっているのが、福岡県のお隣、佐賀県・矢山クリニックの矢山利彦院長です。矢山先生は、ご自宅に加えて、クリニックの隣に『0宣言』の保育園「すこやか保育園」までつくられてしまいました。それだけ室内の空気が人の健康を左右することを、お医者様も危惧さ

れているのです。

また、ダニやカビが少ないことが健康に直結すると、矢山先生はおっしゃっています。調査の結果、『0宣言の家』は、一般の住宅と比べて、ダニの発生量が極端に少ないことがわかっています。先生



佐賀県のモデルハウス

が建てられたご自宅や保育園にも当然、ダニがほほいかなかったことに先生自身、とても驚かれました。

では、家の中にダニがいないと、どうなるかということですが、ダニはカビを餌に数を増やし、その糞や死骸がカビやホコリとともに絶えず空気中に

漂っています。それらは目に見えないほど微細なものです。私たちの口や鼻から体内に侵入し、アトピー性皮膚炎やぜんそくなど、アレルギー疾患を悪化させる原因になるといわれています。頭が痛い、眠れない、肩が凝る、体がだるいといった症状もダニが原因となる場合があるとお聞きしています。つまり、ダニがいなくなれば、そうした症状が起これにくい、もしくは

は症状が緩和されるということです。

矢山先生も、新居に移って疲れが抜けやすくなり、「これですますます元気に働ける！」と喜んでいらっしやいました。ちなみに、私どもが佐賀県に建てた『0宣言』のモデルハウスは、矢山先生の患者さんたちにも宿泊体験施設

病気になるリスクを下げてくれるのが「本物の健康住宅」です。



「国の法律を守るだけでは、お客様の健康・命を守る家につくれない」と熱く語っていた津留社長。どの家も自然素材のみでつくられ、つくり手の想いがこもった、真正正銘の「健康住宅」だ